

---

# なないろの雪

さら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なないろの雪

### 【Nコード】

N27000

### 【作者名】

さら

### 【あらすじ】

ちよつと頼りない社会人一年生の二ノ宮昂。このみやこう 仕事に恋愛に疲れ果て、久しぶりに帰った田舎で、高校の同級生、川瀬雪菜かわせゆきなと再会する。しかし彼女は……懐かしくて切なくて、でも前向きになれる（と思う）お話です。

## 1 初雪の降る夜

あの頃の僕らは、気持ちを確かめ合ったわけでもなく、付き合っていたわけでもなく……

柔らかな日差しが差し込む教室で、僕は彼女の後ろ姿を見ていた。雪のちらつく帰り道、そんな彼女の冷たい手を、ぎこちなく握って歩いた。

頬を少し赤く染めて、はにかんだような笑顔を、僕だけに見せてくれた彼女……

なんで今になって思い出すんだろう。なんであの子のことを思い出すんだろう……

「うつつ……気持ちわる……」

いくら仕事とはいえ、朝からラーメン六杯食べた上に、飲みたくもない酒を上司に無理やり飲まされた。

「最悪……」

よろけるようにいつもの改札を抜け、大きく二回息を吐く。何気なく真つ暗な空を見上げたら、ちらちらと白いものが舞い落ちてきた。

東京郊外の町で無料配布されている、地域新聞の編集部に入社して約八ヶ月。地元の人が喜んでくれるような記事を書くぞ！と意気込んでいた僕に課せられた仕事は、寝ても覚めても広告主への営業ばかり……フリーペーパーゆえ、スポンサーからの広告収入がないと成り立たないわけなんだけど……

たまに特集を任されたと思えば、毎年恒例のラーメン特集。スポンサーの店でラーメンを食べ歩き、記者の生感想を掲載するという

ものだ。

「だからって、一日に何杯ラーメン食わせる気だよっ！ あの編集長め……」

道端でひとり吐き捨てる僕のことを、危ない酔っ払いを見るような目つきで、会社帰りのOLが眺めている。まあ確かに、今の自分は危ない酔っ払いに違いなかったが……

駅から徒歩五分のワンルームアパート。それが僕の部屋だ。

薄暗い街灯の下から二階を見上げると、部屋に灯りが灯っているのがわかる。ふうつとため息のような息を吐いて、最後の力を振り絞り階段を上った。

「ただいまあ……」

「ちよつと昂ちゃん！ 今何時だと思ってるの!？」

耳に突き刺すような、かん高い女の声。

「うるさいなあ……ちよつと静かにしてく……」

「うるさいってなによ！ うるさいって！ 今日は早く帰ってくるって約束したじゃん！」

約束？ そんな約束したかなあ？ 酔いの回った頭で必死に考えるが、思考能力は完全に停止中……

「昂ちゃん！ まさか忘れたんじゃ……」

「あーもう、うるさいっ！ 俺は仕事と、出たくもなかった忘年会で疲れてんだ！ お前みたいに気楽な学生とは違うんだ！ ギャーギャー耳元で騒ぐなっ！」

次の瞬間、僕の腹に強烈なパンチが食い込んだ。

「う……なにすんだ、朋美……は、吐く……」

「吐きたかったら勝手に吐けば!？」

背中を玄関のドアがバタンと閉まる。それと同時に、僕は倒れこむようにトイレの中に飛び込んだ。

「うえっ……最悪……」

トイレにこもること数分。なんとか気を取り直して出てくると、見飽きた狭い部屋が目に入る。

田舎から上京するとき運んできた、小学生から使っているベッド。朋美が気に入って勝手につけかえた、猫の絵がついた少女趣味なカーテン。つけっぱなしのテレビには、今流行のお笑い芸人が映っている。

そしてそんな部屋の真ん中にある小さなテーブルの上に、朋美の手作りらしい料理と、箱に入ったケーキが並んでいた。

『今日が何の日だか覚えてる？』

僕の脳が急速に回転を始める。

『やっぱり忘れてるな？ 今日にはあたしと昂ちゃんが付き合い始めて、ちょうど一年の記念日だよ』

今朝、寝起きの僕の携帯に、朝からやけにハイテンションな朋美の声が聞こえてきた。

『今夜ケーキ買って、昂ちゃんちで待ってるから。早く帰ってきてよ？ 絶対、約束だからね？』

『はいはい、わかったよ。じゃあな』

確かそう答えて電話を切った。

「やべ……」

すっかり忘れてた……僕はあわてて携帯を手に取り、朋美に電話しようとして、やっぱりやめた。

確かに約束を忘れた自分が悪いが、なにも彼氏の腹をグーで殴ることないんじゃないか？ あの暴力女め……

携帯を握ったまま床に寝転ぶ。青白い蛍光灯の灯りを見つめていたら、何もかもがどうでもよくなってきた。

突然耳元で携帯が鳴る。朋美の顔がよぎって無視しようかとも思ったけど、それも面倒で、相手の名前も確かめずに耳に当てる。

「……はい」

「ちょっと昂っ！ あんたどうして電話に出ないのよ！」

電話の相手は田舎の母親だった。どうせたいした用事でもないんだろつと、家族からの電話には出ていなかったのだ。急用なら留守電に入れるだろつし……

「あんたちゃんとやってるの？ 連絡もしないで」

「やってるよ……」

「暮れには帰ってこれるんでしょ？ 父さんがあんたの顔忘れちゃうつてよ」

そういえば今年のお盆もゴールデンウィークも、なんとなく忙しくて田舎に帰っていなかった。

「昂！ 聞いているの？」

「聞いているよ。気が向いたら帰る」

そう言って電話を切ると携帯を放り投げた。

「なんか……疲れた」

猫のカーテンが引かれた窓を見る。さっきちらついていた雪は、まだ降っているのだろうか。そんなことを思いながら目を閉じたら、田舎の雪景色がぼんやりと浮かんで消えていった。

## 1 初雪の降る夜（後書き）

たくさん作品の中から、このお話を選んでいただき  
どうもありがとうございます。

読んだあと、あたたかい気持ちになっていただけたら  
幸いです。

よろしくお願いいたします。

## 2 オレンジ色の教室で

駅から一時間に一本のバスに乗る。雪の少ない東京とは違って、こちらの景色はもう、ほんのり雪化粧をしていた。

バスはのんびりとした田舎道をのろのろと走ってゆく。窓から見える風景は、僕が住んでいた頃と何も変わっていない。

遠くに見えるうっすら白くなった山々も、のどかに広がる畑も、町の真ん中を流れる大きな川も、なんにも変わっていない。

僕はバスに揺られながら朋美のことを想っていた。あの忘年会の日に喧嘩してから、彼女とは会っていない。昨日仕事納めをして、今朝東京を発ったことも、きっと彼女は知らないだろう。

何度も携帯を見つめた。自分から連絡すればいいのに。この前はごめんって謝ればいいのに。僕にはなぜかそれができなかった。

ふと窓の外に視線を移すと、見覚えのある建物が見えた。僕の通っていた高校だ。

「あ……降りますっ」

停留所近くであわててブザーを押す。バスは少し停止位置を過ぎてからゆっくりと止まった。はつきり言って迷惑な客だけど、僕のほかに乗客はおばあさん一人だったから、たぶん許してくれるだろう。

僕をひとり停留所で降ろして、バスはまたのろのろと去っていった。

「はあ……」

澄んだ空気の中で、大きく伸びをしてつぶやいてみる。

「こんな所で降りちゃって……どうする気だ？ 俺」

自分でもわからなかった。実家に帰るなら、バス停はもう少し先だ。なんで学校の前で降りたりしたんだろう。

「まあ、いいか……」

家に帰っても予定はないし、どうせ暇なんだ。学校でものぞいてみるか。

僕はスポーツバッグを肩にかけ、端っこにうっすら雪の積もる道を歩き出した。

懐かしい校庭では、運動部が後片付けをしていた。校庭をぐるりと囲む桜の木も、古びた校舎も、僕がいた頃のままだった。

「変わってないなあ……」

独り言をつぶやきながら校舎を見上げる。すると、どこか懐かしい感情が胸にこみ上げてきて、僕は引き寄せられるように昇降口に向った。

玄関の鍵は開いていた。勝手に入ったら不審者と間違えられるかもしれないけど、僕の足は止まらなかつた。なにか見えない糸で引っ張られるかのように、かつての教室へ向かう。誰もいない廊下は静まり返り、空気が凍りつくように冷たい。

三年三組の教室のドアは、半分くらい開いていた。僕は遅刻してきた生徒のようにそうつと中を覗き込む。その瞬間僕の時間が、五年前に逆戻りしたような気がした。

「……川瀬、さん？」

窓際の席に腰掛けて、外を眺めていた女の人がゆっくりとこちらを向く。長い黒髪に真っ白なワンピース。彼女はほんの少し驚いた表情を見せたあと、控えめに微笑んで僕に言った。

「二ノ宮くん」

「な、なんでここにいるの？」

僕の声に、彼女は静かに立ち上がる。

「夕日を見てたの」

気がつくと、教室の中はオレンジ色に包まれていた。

「勝手に入って怒られない？」

「二ノ宮くんこそ」

そう言って彼女はくすくすと笑う。

ああ、この声、この笑顔……やっぱり僕の知ってる彼女  
雪菜だ。 川瀬

「びっくりした。こんなところで会うなんて」

「わたしも。二ノ宮くん、東京に行っちゃったから」

胸がどきんと高鳴る。なぜか罪悪感のようなものが押し寄せて、  
あせる気持ちを必死に抑える。

「仕事、今日から休みで……実家に帰ろうと思って……」

「そう……」

雪菜が静かに僕の前に歩み寄った。彼女の長い髪が窓からの風に  
揺れ、白い肌が夕日色に染まっている。

「川瀬さん……元気、だった？」

こくと小さくうなずく彼女。そして持っていたマフラーを首に  
巻き、僕に言う。

「二ノ宮くん……一緒に、帰ろうか？」

今度は僕が小さくうなずいた。

### 3 埃だらけの卒業アルバム

校門を出て、田舎道をまっすぐ歩く。僕の家と雪菜の家は同じ方向だった。

「わたし、泣いたのよ」

「え？」

僕の少し前を歩く雪菜は、高校時代よりずいぶん元気そうに見えた。

「二ノ宮くんが東京に行ってしまった」

「……嘘だろ？」

彼女が振り返っていたはずらっぽく舌を出す。

川瀬雪菜は、僕の同級生だ。三年間同じクラスで帰る方向も同じ。でも僕は二年間雪菜としゃべったことはなくて、三年生になって初めて声をかけた。「一緒に帰ろう」って……さっきの彼女みたいに

「なんか、元気そうだね。昔より」

「そう？」

「学校、よく休んでたじゃん？」

「そうね……わたし、体、弱かったから」

雪菜はそう言いながら、黒くて長い髪を耳にかける。そんな彼女の何気なくくせを、僕はいくつも知っている。

僕たちの脇を一台の軽トラックが、のんびりと追い越して行った。雪菜は両手を口元に当てて、はあっと白い息を吐く。

「寒い？」

僕の言葉に雪菜が微笑む。そしてその手を、そっと静かに僕の手に絡ませた。

「あいかかわらず、冷たい手だなあ」

「冷え性だから、わたし」

そう言っ僕で笑う彼女は、昔とにも変わっていない。

僕は初めて手をつないだ時みたいに、少し緊張しながらゆっくり

歩いた。彼女の歩幅に合わせながら。このままこの時間が、永遠と  
続いて欲しいなんて思っていたあの頃を、思い出しながら……

「お兄ちゃん！ お土産はあ？」

風呂から上がると、部活から帰ってきた高校生の妹、愛が声をか  
けてきた。

「……ないよ。そんなの」

「えー！ 東京のお土産ないのー！？」

「ないって。観光してきたわけじゃないんだぞ」

愛はわざとらしく頬をふくらませ、僕のことをにらんでいる。

「昂ー、お風呂出たの？ ご飯食べるでしょ？ 愛、ちよつと手伝  
つてー！」

台所から夕飯の匂いを漂わせ、母親がいつものようにせかせかと  
言う。

「はあい。お兄ちゃん、どこ行くのよ？」

「すぐ来る」

僕はそれだけ言って薄暗い階段を上った。

高校生まで使っていた僕の部屋は、そのままの状態が残っていた。  
僕は埃つばい押入れを開け、中を覗き込む。

「あつた、あつた」

それは何年もほったらかしにしてあつた、高校の卒業アルバム。  
さつと埃を払って、三年三組のページを開く。

「ぶっ、アホな顔」

一番に飛び込んできたのは、幼なじみの健太のバカ面。その隣に  
真面目くさつた顔をした自分が写っている。そして……

「……川瀬雪菜」

彼女は黒い髪を二つに結び、少し緊張したような表情をしていた。

「『二ノ宮くん』……かあ」

僕はアルバムを開いたままゴロンと床に仰向けになる。さつき彼

女から久しぶりにそう呼ばれたのを思い出して、なんだか照れくさくて笑いがもれる。

『二ノ宮くん』

僕のことをそう呼ぶ高校生の雪菜は、目立たない女の子だった。二年間同じクラスだった自分でさえ、たまに帰り道で見かけたことがあったものの、彼女の存在を意識することはなかったから。

だけど三年生になると、僕の席から雪菜の後ろ姿がよく見えた。窓際の席に座る彼女は、普段髪を二つに結んでいたのに、時々下ろしている日があった。気分転換なのか、結ぶ時間がなかったのかわからないけど。

そんな日は窓から差し込む日差しに髪が艶々と光って、彼女の後ろ姿が一段と綺麗に見えた。いや、彼女の白い肌も、地味だけ整った顔立ちも、全部綺麗だと僕は思った。

周りの奴らは、派手目でおしゃれで、アイドルみたいに可愛い女の子のことばかり話していたけど、僕は雪菜のことを、クラスで一番美しいと思っていた。だけどそれを誰にも話したことはない。奴らに彼女の良さがわかるはずはないから。

『明日も、会える？』

さつき別れ際に、思い切って雪菜に聞いた。

『うん。わたしも二ノ宮くんに会いたい』

彼女はそう言って、昔のように控えめに微笑んだ。

#### 4 土手に座って

なんとなく寒くて目が覚めた。手探りで携帯を探して時間を見る。「げっ!?! もう昼?」

飛び起きてあたりを見回す。もしかして、昨日アルバムを見ながら、そのままこの部屋で眠ってしまったとか?

バタバタと階段を駆け下りたら、母親が「あら、やっと起きたの?」と顔を出した。

「なんで起こしてくれなかつたんだよっ!」

「なに小学生みたいなこと言ってるのよ。何度起こしても起きなかつたくせに」

僕は何も言い返せずに、玄関にかけてあったジャケットに腕を通し、靴を履く。

「お兄ちゃん、出かけるの?」

「うん」

「さっき朋美さんって人から電話があつたけど?」

「えっ!?!」

あわてて振り返ると愛がにやけた顔で笑っていた。

「『寝てるから起こしてきます』って言ったら、『いえ、実家にいるのがわかればけっこうです』だって」

「な、な、なんで、あいつ、実家まで電話かけてくるんだよっ」

「ねえ、朋美さんって東京の彼女?」

「う、うるさいっ! 愛、チャリ借りるぞっ」

「えー!?! あたし今日使うんだよ!」

愛が怒った顔で怒鳴る。僕は逃げるように家を飛び出した。

外はどんよりと曇っていて北風が吹いていた。背中を丸めて自転車をこいでいた足をふと止めて、ポケットから携帯を取り出す。

朋美のやつ……用があるならケータイに電話しろよな。画面を開

いて、アドレス帳の朋美の番号を見つめながら考える。

……って言っても無理か。朋美だって意地張って、自分から連絡なんてしないだろう。ただ僕がどこにいるのか気になって、実家に確認だけしたんだろう。

僕はパタンと携帯を閉じた。一言「ごめん」って言えば済む話なんだろうけど、なぜかそれが言えなくて、また自転車を走らせた。

息を切らして学校まで走る。年末のせいか校庭に部活の生徒の姿はなかったが、昨日と同じように昇降口の鍵は開いていた。僕は階段を三階まで一気に駆け上り、恐る恐る教室の中をのぞく。

冷え切った空気と静寂の中、川瀬雪菜は窓側の席に座っていた。真冬だというのに、昨日と同じ真っ白なワンピースを着て……でもそれが彼女にすごく似合っていた。

「あ、あの……」

僕の声に雪菜が振り向く。そして小さく微笑み、こう言った。

「昔と同じね。二ノ宮くん、いつもそうやって遅刻してきた」

教室の中に入り、くすくす笑っている雪菜に近寄る。

「『いつも』遅刻なんてしてないよ？」

「嘘よお。いつも遅刻してたじゃない。そのたびに目覚まし壊れたとか、自転車がパンクしたとか、下手な言い訳して……」

雪菜がさらにおかしそうに笑う。

「わたし、ずっと見てたからわかるの。二ノ宮くんのこと」

僕は黙って突っ立っていた。雪菜はふっと笑うのをやめ、僕のこととをじっと見つめる。

僕も見えていたよ。君のことを。三年生になってから毎日ずっと……

「ごめん、待たせて……寒かったよな？」

「うっん、大丈夫」

雪菜はそう言って立ち上がる。白いワンピースの裾がふわりと揺れる。

「何か食べに行く？ 俺、お詫びにおこるよ？」

静かに首を振って雪菜が答える。

「お腹すいてないの。それより二ノ宮くんと歩きたい」

僕はぼんやりと雪菜の顔を見つめた。そんな僕に彼女は優しく微笑んだ。

学校を出て田舎道を少し歩くと、大きな橋がある。僕らはよくそこから河原に下りて、日が暮れるまで話をしていた。

あの頃のふたりは『彼氏』と『彼女』というわけでもなく、でもただのクラスメイトというわけでもなく……毎日一緒に帰って、たまに道草をして話をする。日曜日にデートをすることもなかったし、電話やメールをし合うこともなかった。

「二ノ宮くんっ、こっち、こっち！」

河原に下りた雪菜が、はしゃいだ様子で僕に手を振る。本当に彼女は元気になったみたいだ。

「ここに座って、ふたりですっとおしゃべりしてたよね？」

雪菜は僕に笑いかけ、土手の草むらの上に腰を下ろす。僕はそんな彼女の隣に座る。

「なに話してたのかしら、あの頃。暗くなるまでこんなところで」「最近読んだ本のこととか、進路のこととか……けっこ真面目な話してたような……」

そうつぶやいて川の流れを見た。あの頃となにも変わることもなく、川は僕たちの前をゆったりと流れている。

「……そうね。ここで、二ノ宮くんが東京の大学受けるって聞いたんだ」

雪菜の声はどこか寂しげだった。僕はあわてて話題を変えた。

「あ、昨日さ、卒業アルバム見てただけ。健太っていたじゃん？ あいつの写真、すっげーぶさいくでさあ」

雪菜が僕の隣でくすくす笑った。

「覚えてるわ。二ノ宮くんとよく一緒にいた子」

「そう」

「他にも野球部だった子とか、クラス委員やった子とか……二ノ宮くん、いろんな子と仲がよかったよね？」

「そうだったっけ？」

「うん。そんなに目立ってたわけじゃないけど、いつも大勢の中でここにこ笑ってた」

「あの頃はなんにも考えてなかったから。くだらない話でバカみたいに盛り上がってたり」

そう、確かにあの頃はなんにも考えてなかった。仕事の悩みも彼女の悩みもなかった。

雪菜はふと黙り込み、そして僕の横顔を見ながらつぶやいた。

「今は……あまり笑わないね？」

ゆっくりと顔を上げて彼女を見る。

「昔みたいに笑わないね？ 二ノ宮くん」

「……それは、まあ、いろいろとあるし……」

雪菜が首をかしげるようにして僕の顔を覗き込む。僕はさりげなく、そんな彼女から視線をそらす。

「……実は、仕事やめちゃおうかな、なんて考えてて……このまま東京帰らないで、逃げちゃおうかな、とか」

「どうして？」

彼女の声が冷たい空気に溶けてゆく。

「東京の大学で勉強して、編集の仕事がしたいって、二ノ宮くん、言ってたよね？」

「うん……」

そう、そうなんだ。僕が雪菜にそう言った。

僕は夢を追いかけて、故郷と彼女を捨てたんだ。

## 5 近すぎる虹

クラスの中で目立たなかった雪菜は、いつも自分の席で本を読んでいた。周りの奴らは、そんな彼女のことを『地味』『暗い』なんて言っていたけど、僕はそんなこと思わなかった。

『なに読んでの？』

一緒に帰るようになってしばらくして、僕は休み時間に思い切つて声をかけた。僕らが放課後以外でしゃべったことなんて、ほとんどなかったから、彼女は少し驚いた顔をしていた。

『あ、あの……いろいろ』

雪菜はそう言つて恥ずかしそうに本を閉じた。別に隠すことないのに……でもそんな彼女は、すごく可愛かった。

『俺もよく本読むよ。あと作文書いたりするのも意外と好き』

『え？』

『信じられないって顔してる』

僕が笑ったら、彼女は頬を赤く染めて首を横に振つた。

『昂ー！ なにやつてんだよ？ 飯買いに行くぞー』

教室の後ろで健太が呼んだ。

『いま行くー』

そう答えて彼女に背中を向けたら、途切れそうな声が聞こえてきた。

『二ノ宮くん……今日も、一緒に帰ろう？』

彼女の声は休み時間の賑やかさに、かき消されそうだったが、僕にはその声ははっきりと聞こえた。

「やめるなんて言わないで。せつかく希望の仕事につけたのに」

今、あの頃と変わらない声で雪菜が言う。

「やりたくてもできない人だっていると思うのに……」

「それはそうだけど……仕方ないだろ？ 川瀬さんにはわからない

んだよ！」

つい感情的になってしまった。雪菜の顔が悲しそうに曇る。やばい。言い過ぎた。謝らなくちゃ……そんなことを考えている僕の隣で彼女は立ち上がり、そしてゆっくりと歩き出す。

北風はさつきよりも強くなり、空から白いものが舞い始めた。雪菜は僕から離れ、マフラーとワンピースを揺らしながら、河原を歩く。

「か、川瀬さん」

彼女の髪がふわりと風になびく。

「川瀬さん！」

僕の声に彼女は振り向いてくれない。

「川瀬さ……雪菜っ！」

僕は彼女に駆け寄っていた。すぐに捕まえないと、彼女の姿は、消えてしまいそうに儚く見えたから。

僕に手をつかまれて、雪菜は静かに振り返る。その瞳はかすかに潤んでいて、とても寂しそうに見えた。

「あ、あの、ごめん。言い過ぎた」

雪菜は小さく首を振る。握った手が氷のように冷たい。

「寒いだろ？ もう帰る。風邪ひくよ」

「……うん」

こくんとうなずいて、彼女は僕の手をそっと握り返した。

橋から雪菜の家まで十五分くらい歩く。そこから僕の家まで自転車で二十分。自転車通学だった僕は、今日みたいに自転車を押しながら、いつも彼女と十五分の道のりを歩いた。

雪は本格的に降り出していた。隣を歩く雪菜の冷たい手を、僕は温めるように握りしめる。

やがて彼女が、薄暗くなった空を見上げながらつぶやいた。

「虹って……」

「虹？」

「そう。虹って、遠くから見ると綺麗だけど、近すぎると見えなくなっちゃうって言うじゃない?」

雪の降る日に虹なんて、どことなくピンとこなかったけど、僕は黙ってうなずいた。

「二ノ宮くんは今、夢に近づいたんだと思う。だから近すぎて見えないのよ」

「夢が……見えない?」

雪菜がにこつと微笑んだ。

「でも大丈夫。二ノ宮くんならきつと夢に届くよ」

雪の中で彼女が白く息を吐く。

「だからいつも笑っていて? わたし、二ノ宮くんの笑った顔が好きだから」

僕は黙って彼女を見つめた。そして返事の代わりに、冷たい手をぎゅつと握る。

僕に見せる彼女の笑顔はとても綺麗で、どうしてもだか切なくなつた。

## 6 彼女いるんでしょ？

『どうして連絡してくれないの？ 昂ちゃん、あたしのこと嫌いになつたの？』

朋美の泣き顔の夢で目が覚めた。布団から這いずるようにして起き上がり、カーテンを開けると、外は一面の雪景色に変わっていた。「どつりで寒いと思った……」

携帯で時間を見ようとしたらメールが何件か入っていた。だけどその中に朋美の名前はない。僕は小さくため息をついて、ひとりの名前に電話をかけた。

『おー、昂か！ やつとメール見たか？ お前今、地元こうち帰ってきてるんだってな！』

健太の声はやたらでかくて、僕は電話を耳から遠ざける。

「なんで知ってるんだよ？ 俺が帰ってきてること」

『昨日お前がひとりで河原にいたの、ウッチーが見たってよ』

ひとりじゃないけど。雪菜と一緒にだったなんて言ったら、面倒くさそうだからそうしておこう。

「で、なんか用？」

『はあ！？ その言い方冷たくね？ 俺らがせつかくお前のために、飲み会開いてやるっていうのに』

健太がそう言ってガハハと笑う。この下品な笑い方、全然変わってない。

『なあ、あれからどうなった？ 例の合コンで知り合った女子大生』  
「さあな」

『さあなつて……お前、ヤな奴になったなー！ ま、いいか。あとでゆっくり聞いてやるから。んじゃ、今夜六時に浜ちゃんちな』

「え、ちょっと、俺まだ行くとは……」

『お前が来なきゃ話しになんねーだろ！ 絶対来いよ！ じゃー！』

健太の声がぷつりと切れた。

なにがお前のためだよ？ 自分たちが飲みたいだけだろ？ ……  
だけど

「しょーがない、行ってやるか」

どうせ夜は暇だし。正直あいつらに会いたって気持ちもちよつとはあった。

僕は携帯をポケットにつっこむと階段を下りた。

教室のドアを開けると、今日も彼女はそこにいた。

「はやっ。今日は俺のが先だと思っただのに」

僕の声に雪菜が振り向き、いつものように微笑む。

「外、すごい雪ね」

「うん、久しぶりに雪道歩いたら滑って転んだ」

雪菜がぐすくす笑っている。僕も少し一緒に笑った。

そして教室に入り、彼女の座る席に近寄り、一緒に窓の外を眺めた。

外は一面白い世界。山も道路も校庭も桜の木も……雪菜の着ているワンピースのように真っ白だった。

「寒くないの？ そんな薄着で」

彼女の服はやっぱり季節外れに思える。

「おかしい？ かな」

「いや、すごく似合ってるけど。俺、川瀬さんの制服姿しか見てなかったし」

「そうね。わたしたち、学校以外で会ったことなかったもんね」

雪菜がそう言って遠くを見た。あの頃の僕らの関係は、いったいなんだっただらろう……

微妙な距離でぎこちなく並んで歩いた、初めての帰り道。

突然雨が降ってきた午後、彼女の傘の中で密かに雨に感謝した日。

落ち葉の季節、東京に行くと言った僕の隣で、寂しそうにうつむいた彼女。

雪のちらつく帰り道、彼女の冷たい手を握ったまま、最後まで大事なことを言えなかった僕。

「川瀬さん……俺……」

また降りはじめた雪を見つめる彼女に、僕はなにを言おうとしていたのか……ふと雪菜は振り向き、いたずらっぽくこう言った。

「二ノ宮くん、彼女いるんでしょ？」

「へ！？」

予想外の言葉に、自分の声が裏返る。

「だめよ、彼女泣かせたら」

「な、な、なんでそんなこと知って……」

雪菜がくすつと笑って立ち上がる。

「やっぱりいるんだ、彼女」

「え？」

「二ノ宮くんが元気なのは、彼女と喧嘩でもしたんじゃないかって思っ……試してみただけ」

「た、試してみた？ それをバカ正直に答えている僕って……」

「ねえ、どんな子？ どこで知り合ったの？ どっちから好きになったの？」

「……川瀬さん、僕たちは、そういう話をするためにここに来たわけでは……」

「ねえ、教えて？ 二ノ宮くんの好きになった子って、どんな子？」

「……」

雪菜は目をくりくりさせながら僕の顔を覗き込む。頼むからそんな目で見ないでくれ、そんな目で見られたら、僕はなんでも話してしまう……

「合コンで……知り合った子で……」

「合コン？ 東京ってそういうの本当にあるのね！ で、どっちが先に声をかけたの？」

「俺、かな？」

「……そう、なんだ」

雪菜のテンションが急に下がった。そしてほんの少し間を置いて、また笑顔でこう言った。

「二ノ宮くんは、自分からそういうこと言える人じゃないと思ってた」

確かに。僕もそう思ってた。自分から言える人だったら、高校の時、とつくに君に言ってる。

「で、どんな子？」

「どんな子って……うるさくて気が強くて、すぐに暴力振るう子」  
「嘘だあ……」

静かな教室に雪菜の笑い声が響く。僕は続けて言った。

「だけど……気が強いくせにすぐ泣くし、意外と寂しがりやだし……なんていうか、俺がいないとこいつダメなんじゃない？ みたいな……」

「大事なのね」

雪菜がそう言って僕を見る。

「きつと彼女泣いてるわ。二ノ宮くんがなくて寂しいって……だから早く連絡してあげてね？」

僕の胸がぎゅっと痛む。夢で見た朋美の泣き顔が頭をよぎる。

「でも、俺、殴られたんだぞ？ 腹を、グーで」

雪菜がおかしそうに笑って、そして言う。

「それでも許せちゃうほど、可愛い子なのね。きつと」

冷え切った教室の中で、僕たちの息が白く浮かぶ。外には雪が降りしきり、僕らの声が途切れると、この世には誰もいないのかと思うほど、静かだった。

## 7 どこに行くの？

外は雪が降りしきっているというのに、雪菜は僕と歩きたいと言った。だから僕らは教室を出て、いつもの道をまた歩いた。

雪の大晦日。冬休みで学生の姿がない元通学路は、車の通りも少なく、雪のせいでさらに静まり返っていた。さくさくと雪を踏みしめる音だけが耳に響く。

こんなところを歩いていると、東京の通勤ラッシュや繁華街の騒がしさが、まるで夢の中の出来事のように思える。それとも雪菜とふたりでいるこの白い世界のほうが、夢なのだろうか……

雪の中を歩く彼女は、なんだか綺麗に見えた。雪菜の髪に肩にワンピースの裾に、粉雪が舞い落ちる。彼女は寒さなんて感じないのかと思うほど、嬉しそうに僕の少し前を歩いた。

「川瀬さんは？」

「え？」

雪菜がくるりと振り返る。

「彼氏とか、いないの？」

くすつと笑って僕に言う。

「ないしょ」

「ずるいぞ！俺だけしゃべらせといて」

雪菜はおかしそうにくすくす笑って、僕から逃げるようにぴよんぴよんとはねる。なんだか雪うさぎみたいだ。

昔の彼女は学校も休みがちで、顔色もあまりよくなって、もっと元気がないように見えた。だけど特に今日の彼女は、よく笑うしよく跳ねる。雪が降って嬉しいのかな？

「二ノ宮くんは知ってるくせに」

「え？」

僕に背中を向けて、両手を後ろに組んで、空を見上げながら雪菜が言う。

「わたしの好きな人、知ってるくせに」

冷えた心臓がどくと動く。目の前に見える彼女の背中が、制服を着ていた後ろ姿に見えて、あの頃の気持ちがよみがえってくる。

「知ら……ない」

雪菜が振り返ってかすかに微笑む。

「じゃあ教えてあげない」

あの頃、僕が、彼女が、自分の気持ちを伝えていたら……今は変わっていたのだろうか……そんなことを思ったら、切なくてもどかしくて、でもどうしようもなくて……胸が苦しくなった。

昨日と同じ河原に下りた。凍えるように木の枝が揺れているそこは、あまりにも寒すぎたから、さすがの僕も帰りたくなった。

だけど雪菜はじっと、空から舞い落ちる雪を見上げていて、その横顔は……くさい言い方だけど……天使のように見えた。僕はそんな彼女につぶやく。

「昨日の……虹の話だけ」

雪菜が少し微笑んで僕を見る。

「近すぎて見えないって、恋人同士もそうなのかも……」

朋美とはあまりにも近すぎて、僕はきつと最初の気持ちを忘れていた。

「ありがと。川瀬さんに言われて気がついた」

雪菜は目を細めて幸せそうな表情をする。

「明日……初詣でも行くこよ。健太たちも誘ってさ」

僕の声に彼女はしばらく黙り込んで、そしてつぶやいた。

「ごめんなさい。明日はもう会えないの……」

「え？」

「もう行かなきゃいけないの」

「どこに？」

雪菜が髪をそっと耳にかける。僕の知っている彼女のしぐさ。僕は彼女のことを、なんでも知っていたはずだった。

「どこに行くの？」

雪菜は答えなかった。寂しそうに僕に微笑みかけ、そして歩き出す。

「二ノ宮くん……わたしに話しかけてくれて、ありがとう。あの一年間、わたしすごく楽しかった。本当に、本当にありがとう」

彼女の姿と声が、雪の中に消えてゆく。僕は大声で彼女の名前を呼んで、駆け寄ろうとする。だけど、体がうまく動かなくて、夢の中で必死にもがいているみたいで……とうとう僕は彼女の冷たい手を、つかむことができなかった。

## 8 知らされた事実

「でさ、聞いてる？ 昂、俺の話」

僕の目の前に、見覚えのある顔がぬつと現れる。

「え？ こっ、どっ？」

悪夢から目覚めたような、すごく嫌な感覚。体中がなぜかだるい。  
「はあ？ お前もう酔ってんの？ ここは浜ちゃんちだろ？ お前自分で歩いてここまで来たんだろーが！」

健太がガハハと笑って、それにつられて浜ちゃんとウツチーも笑い出す。

「……そうだったっけ？」

「昂、お前酔うとおもしろいな。ほらもつと飲め」

「なんだっってお前のために飲み会開いてやったんだからな」

缶ビールを開けて健太が差し出す。なんだかよくわからなかったけど、僕はそれを一気に飲んだ。

アルコールが体に入れば入るほど、僕の頭は冴えてきた。本当は酒なんか強くもないはずなのに。

「それにしても久しぶりだよな。昂、お前に会ったの何年ぶり？」

「高校卒業して……あ、大学行ってるとき、一回会ったっけ？」

「ああ、みんなだ昂の下宿先に押しかけて……ガハハ、笑えたよなあー、あの夜は」

高校を卒業すると、東京の大学に行く奴らと、地元に残る奴らに別れる。僕の友達はずいぶん地元組ばかりだったから、会うこともめったになかった。

「で、彼女とはどうなんだよ？ 例の女子大生の」

健太が缶チューハイを片手に詰め寄ってくる。

「どうって、べつに」

「わ、出た！ 『べつに』だって！ やっぱ東京人は違うねー」

「東京人って言うなよ」

「でもさ、昂っていつも『べつにー』だよな？」

トリードマークの黒ぶち眼鏡を押し上げながら、ウッチーが言う。  
「高校の時、ちよっと噂になったじゃん？ あの、なんて名前だっけ、おとなしめの……」

「あれだろ、あれっ！ 川瀬雪菜！」

「ああ、そうそう、川瀬さん！」

僕の頭に雪菜の姿がよみがえる。

「『川瀬さんと付き合ってたの？』って聞いても『べつにー』だったし」

「けど、あれって実際どうだったの？ お前ら、付き合ってたわけ？」

僕の前に顔を寄せて、答えを求めてくる健太とウッチー。

「付き合ってたなんか……」

言いかけた僕の耳に、浜ちゃんの低い声が響いた。

「……お前ら、知らねえの？ あの子……亡くなったんだぞ？」

みんなが驚いた顔で振り向いた。でも一番驚いていたのは僕だと思っ。

「亡くなった？」

健太が浜ちゃんに聞く。

「ああ、俺もつい最近知ったんだけど。ほら、あの子、体弱かったらしいじゃん？ 卒業したあとも、入院繰り返してたらしくて。半年前くらいに、なんとかって病気で……」

「嘘だっ！」

思わず立ち上がった僕を健太や浜ちゃんが見上げる。

「俺、さつき会ったから。そんなの嘘に決まってる」

「……昂。お前なに言ってるの？」

「だから！ 俺、さつき川瀬に会った……」

「嘘じゃねーよ。その話聞いたあと、俺、優美子達と墓参りに行ったもん。女子もほとんど、彼女の訃報知らなかったらしいけど」

墓参り？ 訃報？ 嘘だ。嘘だ。こいつらまた僕のことをからかって……

「昂！？ ちょっと待てよっ！」

僕の背中に健太の声が聞こえた。だけど僕は振り返らずに、夜道を雪菜の家に向かって走った。

雪菜の家の前までは何度も来たことがあったけど、家のインターホンを鳴らすのは初めてだった。夜はすっかり更けて、冷静に考えれば迷惑な時間だ。だけど僕はためらわずにそれを押した。

しばらくして真つ暗な玄関に灯りがつき、パジャマの上にカーデイガンを羽織った、雪菜の母親らしき人が顔を出した。

「あ、あのっ……夜遅くにすみません。ゆ、雪菜さんに会いたくて……」

おばさんは不思議そうな顔をして僕を見ていたが、やがて優しい笑顔になってこう言った。

「二ノ宮くんね？」

「え、あ、はい」

「雪菜からあなたのことはよく聞いてたから。すぐにわかったわ」  
そして玄関のドアを大きく開けると

「どうぞ、上がってください」

と、僕を部屋に入れてくれた。

家族が寝静まったような時間、おばさんは電気をつけて僕を一番奥の部屋に案内した。

初めて来た雪菜の家。どこか懐かしい匂いがする。

「雪菜。二ノ宮くんが来てくださったわよ」

綺麗に片付いた和室の隅に、真新しい仏壇があり、その上に遺影が置かれていた。僕は立ち止まって、じっとその写真を見つめる。

「あの子、入院中もあなたの話ばかりしていて……やりたいこともたくさんあったとは思っけど、きっとあの子はあれで、幸せだった

んじゃないかって思うんです」

おばさんの声がつつと耳を通過する。写真に写る控えめな笑顔は、僕の知っている『川瀬雪菜』に違いなかった。

「ありがとうございます。雪菜と仲良くしてください……」

笑顔のまま、おばさんの目に涙が光る。だけど僕はしゃべることも、泣くこともできなくて、呆然とその場に突っ立っていた。口の中がカラカラに渴いて、息をするのがつらい。

僕は雪菜のことを、なにひとつ知らなかった。

## 9 七色の雪

「お兄ちゃん、いつまで寝てるの？ もう昼だよ？」

愛の声で起こされた。目を開けば目の前に、見慣れない愛の晴れ着姿……

ぼけっとしてたら、愛が勢いよくカーテンを開き、まぶしい日差しの中でこう言った。

「一応言っとく。あけましておめでと。お兄ちゃん」

愛がさっさと部屋を出て行く。

ああ、そうか。今日は元旦だっけ……新しい一年の始まりなんだ

……

外は冬晴れだった。積もった雪に朝日が反射して、銀色に輝いている。

僕は寝癖のついた頭のまま、しばらくぼんやりとそんな風景を眺めていた。

階段を下りると、居間でひとり、おせちをつまみながら酒を飲んでいる、父親の姿が見えた。

「あら、やっと起きた。昂、あんたも愛と一緒に初詣行ってくれば？」

「げ！？ やめてよ！ 兄貴と初詣行くなんて、ありえないでしょ！？」

台所で騒いでいるのは、母親と愛。言わせてもらうけど、こっちだつてごめんだよ。僕は黙って父親の座っているこたつに足をつっこんだ。

「……昂。東京ではちゃんとやってるんだろっな？」

無口の父親がボソツとつぶやく。

「会社に遅刻なんかしちゃ、駄目だぞ？ もう社会人なんだからな」

「わかってるよ」

そう言っておせちをつまむ。愛が「いつてきまあす」と言っておせちを出て行く。

「あ、昂。そのお味どう？　今年は新しくできたスーパーで買ったみたの」

「え？　手作りじゃないの？」

「いいじゃない！　たまには母さんだつて人に作ってもらったもの食べたいのよ」

母親もこたつに入って、おせちをつまんだ。

「あら、このお豆、いいお味じゃない！　ねえ？　お父さんもそう思わない！？」

父親は何も答えないまま、また一口酒を飲む。

昔から変わらない父と母。きつと来年も再来年も変わらない。健太も浜ちゃんも、古びた校舎もこの町も、きつとずっと変わらない

僕だけが、変わってしまったんだ……

「まあ、やだ、あんた泣いてるの？」

母親が不思議そうな顔で僕を見る。

「ヘンな子ねえ？　お正月から涙流して……」

父親も何も言わずに僕を見ている。

「……ごちそうさま。ちよつと出かけてくる」

「大丈夫なの？　どこか具合でも悪いんじゃないの？」

僕は黙って首を横に振ると、ジャケットをつかんで外へ出た。

真っ白な雪を踏みしめながら歩く。除雪された道路以外は、遠くの山も道端の木も家の屋根も、何もかもが白く染まっている。

じゃれあうようにして歩いてくる、小学生たちとすれ違った。無邪気な笑い声が、僕の耳を通り抜けてゆく。

子供の頃は、雪が降ると外へ飛び出していた。雪合戦したり雪だるま作ったり、雪は僕らの楽しいおもちゃだった。それなのにいつからだろう……雪が、ただ白くて冷たい、どちらかと言えば迷惑なものに変わってしまったのは……

そういえば朋美がスノボやりたいつて言ってたよな。お正月明けたら一緒に行こうって……あの話はどうなったっけ……

そんなことを考えながら黙々と歩いていたら、いつの間にかあの校舎が見えてきた。僕は引き込まれるように、雪の積もった校庭に踏み込む。きつと鍵は開いている。そしてきつと、彼女に会える。

校舎の中はひんやりと冷たかった。三階までの階段を、一段一段上る。そして祈るような気持ちで教室のドアを開くと、窓際のいつもの席に、やっぱりその姿はあった。

「……川瀬さん」

白いワンピース姿の雪菜が、静かに顔を上げる。彼女の向こうには雪景色が広がっている。

「二ノ宮くん……」

「どうしても、もう一度会いたくて……」

僕の言葉に雪菜が微笑む。不思議なことに、怖いとかそんな気持ちは全然なくて、僕は普通に彼女と会話をしていた。

「ごめん……俺、川瀬さんにありがとうって言ってもらえるような人間じゃないよ？」

彼女は黙って僕を見つめる。

「だらしないし、意気地なしだし、根性ないし、口下手だし……いいところ全然ないじゃん」

開いた窓から風が吹き、彼女の黒い髪が揺れる。

「それより……お礼を言わなきゃいけないのは俺のほうだよ」

君と帰れる放課後が待ち遠しかった。

中学生みたいだって笑われるかもしれないけど、並んで歩いて、他愛のない話をするだけで楽しかった。

そばにいらられるだけで嬉しいと思った。

君と過ごせたあの一年は、本当に本当に幸せだった。

「ありがとう……」

カタンと小さな音を響かせて、雪菜が立ち上がる。そしてゆっくり

り僕の前に歩み寄ると、目を閉じて、そつと僕にキスをした。

「……………今度こそ、本当にさようなら」

その声は、空の果てから聞こえてくるようだった。

「二ノ宮くんは今のままで大丈夫だよ……………ずっとずっと……………変わらないでいてね」

彼女の笑顔が霧のように消えてゆく。

「ありがとう……………二ノ宮くん」

息を吸い込んで窓際に駆け寄った。冷たい風がびゅっと頬に吹き付けて、一瞬強く目を閉じる。

そして次の瞬間見たものは

一面の白い世界に架かる虹。七色の粒子が空から舞い落ちて、真っ白な雪を色鮮やかに染めてゆく。

「雪菜……………」

彼女の姿はもう見えなかった。恥ずかしそうに話すあの声も聞こえないし、あの冷たい手を温めてあげることができない。

雪菜にはもう二度と、会うことができないんだ。

気がつくのと、外の景色はもとの白さに戻っていた。小さくしゃみをひとつとして窓を閉めると、僕はまた、雪の道を家に向かって歩いていった。

10 誰よりも好きでした

いくつもの荷物を持ってバス停に立つ。出掛けに母親があれもこれもって食べ物を持たせるから、家出でもするかのような荷物になっちゃったじゃないか。

だけど僕は知っている。玄関を出るとき振り返ったら、母さんの目が少し潤んでいた。父さんはいつものように何も言わずに僕を見ていた。

「お兄ちゃん！」

両手に白い息を吐きかけたとき、愛が僕に駆け寄ってきた。

「これっ！ 渡すの忘れてた」

愛が僕の前に小さな紙袋を差し出す。

「お兄ちゃんのために買ってきてやったんだから！ ありがたく思っつてよ」

寒そうに両腕をさすりながら、ぶつぶつ言ってる愛の前で袋を開けると、中から近所の神社のお守りが出てきた。

「恋愛成就……」

「そう。ちゃんと彼女と仲直りしなさいよ」

「うるせえなあ………いらないけど、もらっついてやるよ」

「なにその言い方！ 超むかつくしっ」

遠くからバスが近づいてくるのが見えた。僕はお守りをポケットに押し込んで、両手に荷物を持つ。

「んじゃ、行くわ」

「今度帰ってくるときは、東京のお土産買ってきてよ！」

「忘れなかつたらな」

バスが僕らの前で止まる。ひとけの少ない車内に乗り込んで席に座る。動き出したバスの窓から、小さく手を振っている愛の姿が見えた。

駅に着いてバスを降りたら、知り合いのおばさんにばったり会った。おばさんは

「あら、ほんとに昂ちゃん？ 大きくなっちゃって……」

「東京で働いてるの！？ まあ、立派だわねえ……」

なんて一方的に話したあと、バスに乗っていつてしまった。おかげで僕は電車に乗り遅れ、三十分時間をつぶすはめになった。新年早々ついてない。

ただっ広いロータリーがあるだけの、なんにもない駅前。仕方なく、古いベンチにぼうつと座っていたら、一台の軽自動車が僕の前  
に止まった。

「やっぱりいたな。どうせ乗り遅れると思ってたよ」

にやにや笑いながら運転席から降りてきたのは健太だった。

「なんだよ、何か用？」

「お前あいかかわらず冷たいなあ。俺がせっかく見送りに来てやつたつていうのに」

健太はなんだかんだ言いながら、僕の隣に座ってタバコを取り出す。そしてふうつと煙を一息吐いたあと、青い空を見上げながらつぶやいた。

「ちよつとさ、お前のことが気になって……ほら、なんかお前元気ねえから」

健太の車の後ろにワゴン車が一台止まり、女の人を降ろしてまた走り去る。

「ま、なんだ、人生いろいろあるよな。俺だつてよ、超むかつく上司がいてさ、毎朝仕事行きたくねーって思うよ。この正月休みが一生続けばいいのにつてさ」

そう言つて健太がガハハッと笑う。その笑い声を聞いてたら、なんだか悩んでいるのがバカみたいに思えてきて、一緒になつて笑つてしまった。

「実家で楽してる俺だつてそう思うのに、昂は東京でひとりだろ？  
すげーなつて思うよ、やつぱ」

「べつにすぐくなんてないよ」

健太はハハッと笑って立ち上がると、ポケットから車のキーを出す。

「ま、なんかあったらメールしな。たいして役には立たんと思うけど」

「うん、そうする。サンキューな、健太」

僕が言ったら、健太が背中を向けたままつぶやいた。

「なあ、昂。ひとつだけ、聞いてもいいか？」

「なに？」

健太が振り向き、ちよつと真面目くさった顔で言う。

「お前高校るとき……川瀬のこと、どう思ってたん？」

僕は黙って健太を見た。その後ろにある寂れた駅前の風景が、一瞬あの七色の雪景色に見えた。

「好きだった……」

かすかに踏み切りの音が聞こえてくる。

「好きだった。すごく……誰よりも……」

ずっと胸の奥にしまっていたその言葉を、初めて口にしたら、彼女との思い出がこみ上げてきた。健太はふつと目を細めて、そんな僕の頭をぱこんつと殴る。

「いつてーなあ」

「んじゃ、俺は行くわ」

笑いながら車に乗り込む健太。

「じゃあなつ、昂！」

「ん……また」

健太はヤンキーみたいに車のマフラー音を響かせてから、クラクションをひとつ鳴らして、僕の視界から消えていった。

## 11 明日まで待てない

電車に乗り込み席に座ると、携帯を取り出しメールを送った。

『今日帰る。明日、会えないかな？』

そのあと少し考えて、もう一度メールを送る。

『この前はごめん』

パタンと画面を閉じて窓の外を見る。白くてのどかな景色が、川の流れのようにゆるやかに目の前を流れていった。

終点の新宿駅からさらに電車を乗り換えて、東京のはずれの駅に着いた頃、あたりはすっかり暗くなっていた。

荷物を抱えてホームに降り、携帯を開く。朋美からの返信はやっぱりない。

いつもの改札を抜けると、冷たい風が頬に当たった。思わず立ち止まって空を見上げる。空気は凍りつくように冷えて寒かったけれど、白い雪の気配はない。その代わりにいくつかの星が、僕の頭の上で瞬いていた。

「さむ……」

駅からあふれ出た人たちは、足早に僕を追い越し去ってゆく。何気なくつつこんだポケットの中で、愛にももらったお守りの袋が、かさつと小さな音を立てる。おじいさんみたいに背中を丸めて、僕も流れに沿ってゆっくりと歩き出した。

駅から五分。ほんの少し懐かしいアパートが見える。白い息を吐きながら階段を上って、部屋の鍵を取り出そうとしたとき、僕はまるで漫画のように、両手の荷物をどさつと落としてしまった。

「と、朋美!？」

部屋のドアにもたれるようにして、朋美が座り込んでいる。うつむいて、ひざに顔をつけて、手には携帯を握りしめて……

「朋美！ なにやってんだよっ！ 鍵持っていないのか！？」  
僕があわてて駆け寄ると、朋美は心なしに潤んだ目をして僕を見上げた。

「……昂ちゃん？」

「バカっ！ この寒いのにこんなところで……凍死したらどうすんだよっ！？」

「凍死？ やだあ、するわけないじゃん」

朋美が笑いながら立ち上がり、そして言った。

「明日まで待てないから……今日来ちゃった」

「え」

「一緒にケーキ食べよ」

そばにあった小さなケーキの箱を持ち上げて、肩をすくめていたずらっぽく笑う。そんな朋美を見たら、思わずその小柄な体をぎゅっと抱きしめてしまった。

「昂ちゃん？」

「ごめん……この前は約束忘れて……」

朋美の手がそっと僕の背中に触れる。

「もういいよ。あたしこそ殴ったりして、ごめんね？」

いつも聞いていた朋美の声を聞きながら、僕はその手に力をこめた。

「……昂ちゃん？ 泣いてるの？」

どうしてだろう。どうしてだか涙が止まらない。女の子の前で泣くなんて、情けないって思うけど……でも押さえきれない気持ちがあふれて、どうしても涙が止まらない。

「やだ、昂ちゃん……あたしにそんなに会いたかったの？」

朋美がおかしそうに笑いながら、僕の背中を優しくなでる。

「しょうがないなあ、昂ちゃんは。あたしがいないとやっぱりだめね」

もしかしたら、そうなのかもしれない……

11 明日まで待てない(後書き)

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

次回、最終話となります。

よろしく願います。

## 12 夢に向かつて……

「昂ちゃん……朝だよ？ 起きて？」

僕は毎朝、彼女のキスで目を覚ます。

「うーん……朋美い、今何時？」

「八時……半かな？」

「……八時半!？」

布団を蹴飛ばし目覚まし時計をつかむ。何度瞬きを繰り返しても、何度目をこすつても変わらない……今の時間は八時半……

「なんで起こしてくれなかったんだよっ！」

「起こしたじゃん、何度も。でも昂ちゃん全然起きないし。昨日遅かったから疲れてんのかなあなんて……」

「あー、もう！ 遅刻したらまた編集長に怒鳴られる！」

「なによあ、あたしのせいだつて言いたいのか？」

ベッドの上にぺたんこ座って、ふくれっ面をしている朋美。

いや違う、朋美のせいじゃないよ。小学生の頃から通知表に『遅刻をやめましょう』と書かれていた。それなのにいつまでたつてもやめられない僕……『朝が弱い』というのは一種の性格で、性格というのは簡単には直せないもので……なんて言い訳している場合ではない。

編集長の怒った顔を想像しながら、ワイシャツを着てネクタイを締める。四十五分の電車に乗れば、なんとか間に合うかもしれない。

「ご飯は？」

「いらないっ」

顔を洗ってささつと髪を整えて玄関に出る。『会社に遅刻なんかしちゃ、駄目だぞ?』ふと、いつかの父親の言葉が頭をよぎり、冷や汗が出る。

「んじゃっ……」

「あつ、ちよつと、昂ちゃん……」

朋美の声をさえぎるようにドアを閉めた。その瞬間、冷たい風が頬に当たり、アパートの廊下から白い景色が見えた。

「雪？」

いつの間に降ったんだろつ。めつたに雪の降らない東京の街が、一面真っ白に染まっていた。

「雪菜……」

なぜかそのとき、雪菜の柔らかな笑顔が僕の頭をかすめた。

「あ、あのさつ、朋美」

振り返ってドアを開ける。朋美はさつきと同じように玄関に立っただままだった。

「今度の週末……どこか行こうか？」

朋美の顔がぱあつと明るい笑顔になる。

「うん！ あたしスノボやりたいっ！ 温泉も！」

「いいよ。行こう」

「うわつ、楽しみー」

子供みたいに嬉しそうにはしゃいでいる朋美。そんな彼女を見ていたら、なんだかこっちまで幸せな気分になってくる。

「昂ちゃん」

「ん？ なに？」

「……時間、いいの？」

「やべつ……」

四十五分の電車……間に合わない。

「昂ちゃん！ いってらっしーい！」

雪道を走りながら振り返ったら、アパートの廊下から朋美が笑顔で手を振っていた。

僕は今日も満員電車で揺られている。駅に降りたら会社までダッシュして、上司に怒られて、また営業先へとダッシュする。口下手だからスポンサーは取れないし、記事を書かせてもらえばダメ出し

ばかり……サービス残業、休日出勤、強制的に新年会……

でもたまにはいいことだってある。毎日ひたすら通って食べ続けた、ラーメン屋の親父に気に入られて広告もらえたし、この前取材して書いた『商店街復活』の記事は、めずらしく編集長に褒められた。

夜十時。残業を終えて電車に乗り込む。仕事帰りのサラリーマンや酔っ払いに囲まれながら、つり革につかまってぼんやり夜景をながめる。朝積もっていた雪は、もうほとんど消えてなくなっていた。

僕はこうやって、少しずつ歩いていくのだ。君との思い出を胸にしまつて、今はよく見えない、大きな夢に向つて……

## 12 夢に向かって……（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

いつも読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、  
評価、感想をくださった方、本当に感謝です。

いろいろなことに疲れたとき、ちょっと立ち止まって  
後ろを振り返ってもいいですよ？

そしたらまた、前を向いて歩いていけると思っているので。  
そんな気持ちをこめて、このお話を書きました。

どうもありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2700o/>

---

なないろの雪

2010年10月28日09時10分発行